

ぼくたちわたしたちの 5月 みちしるべ

~Run to the FUTURE~

VOL. 100



全国のみんなこんにちは!!

そよ風に揺られて、新緑のほんのり甘いさわやかな香りがしますね。自然観察にはぴったりの季節になりました。色とりどりの花、楽しい動きをする虫、陽気にさえずる鳥、時には彼らに会うために、戸外に出かけてみてはどうでしょう?きつと、たくさんのごちそうを感じ、新しい自分のごちそうも発見できると思いませんか。知るということはとても楽しいこと。知りたいと思えるのはもっと楽しいこと。みんなの年頃に得られる好奇心は、これから先も、みんなを支えてくれる宝物になってくれるはず。さあ、この季節、小さな探検に出かけてみましょう。もちろん、家庭学習も忘れないでね。

いよいよ小学校でも本格的な英語がスタート!

「小学校から英語が始まりました」

Q 今までも小学校で英語をやっていたんじゃない?

A これまでは、教科ではありませんでした。

学習指導要領が改訂され、2020年度から小学校の学習カリキュラムが改められます。今回の改訂で話題になっていることの一つが、小学校でも英語を教科として学ぶようになることです。

これまで小学校では、5、6年生で「外国語活動」として英語を扱ってききましたが、これは教科として外国語を学ぶのではなく、「外国語に親しむ」ことが目的でした。

学習指導要領の改訂によって、5、6年生は「外国語」という教科として英語を学ぶことになり、今まで英語にふれていなかった3、4年生で「外国語活動」に取り組むことになりました。

Q 教科になると、何がかわるの?

A 習得する内容が明確に示されます。

「外国語活動」は外国語に親しむことが目的で、「聞く」「話す」ことが中心でした。また、教科ではありませんから、多くの自治体では成績がつくこともありませんでした。

教科となる英語では、「聞く」「話す」に加えて段階的に「読む」「書く」ことも始まります。学習指導要領には習得すべき文構造なども示され、中学、高校につながる英語学習が小学校の英語にもしっかりと位置づけられたと考えられます。特に文字指導の「書く」が加わったことは中学校への接続を意識した大きな変化です。また、正式な教科ですので、他教科と同様、成績もつけられます。

単語についても、600~700語程度を扱う(3、4年生の「外国語活動」で扱うものを含む)という目安が示されました。教科化されることによって、小学校でも本格的な英語の学習が始まるといえるでしょう。

「小学校から英語を始める理由」

Q どうして英語教育に力を入れる必要があるの?

A 急速にグローバル化が進む社会で生きていく力を身につけるためです。

5、6年生の英語が教科化され、「外国語活動」が3、4年生から始まるという変化は、英語教育のスタート時期を単純に前倒しするというわけではありません。小学校から高校までの英語教育全体の改革なのです。

今回の英語教育改革では、目指すべき英語レベルの引き上げが行われます。例えば高校卒業時点では、英語の日常会話はもちろん、英語を使った授業を受けたり、英語の資料を読みこなしたり、時には英語で議論したりすることができる英語力を身につけていることが求められます。

これを実現するためには、内容的にも時間的にも、これまで以上の充実が必要です。そこで、教科としての英語学習のスタートを従来の中学1年生から小学5年生に早め、これまで5、6年生で取り組んでいた「外国語活動」は3、4年生から始めることになったのです。

Q 英語が必要になる人ってごく一部では?

A どんな職業、地域でも、グローバル化の影響があるんです。

今までは当たり前のように使われるようになった「グローバル化」という言葉。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時には、さらに多くの外国人が日本を訪れることが想像できますし、インターネットやSNSなどでさまざまな国の人とコミュニケーションをとることも日常的に可能になってきています。

また日本では少子高齢化が進み、労働力減少による外国人労働者の受け入れや海外へのビジネス展開など、社会構造の変化も予測されています。

このような状況の中で、実質的な世界共通言語ともいえる英語を使いこなせる力は、新しい時代を生きていく子どもたちにとって大切な力の一つであり、大学入試改革の方向性とも流れを一つにするものなのです。



「身近な言葉が中心です」

Q 小学校のうちからたくさんの単語を覚えなきゃいけないの?

A 600~700語程度の単語を扱います。

2020年度から実施される次期学習指導要領では、3、4年生の「外国語活動」と5、6年生の英語で、合わせて600~700語程度の単語を扱うとしています。

これまで中学3年間の英語で扱う単語数は1200語程度とされてきました。そのうち、中学1年生で扱う単語が500語程度ですので、小学校で4年間かけて扱うとはいえ、600~700語程度という数には、それなりのボリューム感があります。

その分、中学、高校で扱う単語が減るということはありません。次期学習指導要領では、中学校で1600~1800語程度、高校で1800~2500語程度を扱い、小学校から高校卒業まで合計4000~5000語程度扱うものとされています。

Q 小学生がそんなにたくさんの英単語を覚えるのって大変なのでは?

A 身近なものや、実際の会話で使うものが中心です。

小学校の英語で扱う単語は、身近なものの名称や月や曜日を表す言葉、職業を表す言葉、基本的な修飾語、数や回数の数え方、頻度を表す言葉などが中心になります。

これらの言葉はいずれも、「自分のこと」や「相手のこと」に関する会話をするときに必要になるものです。誕生日はもちろん、好きな食べ物や憧れの職業など、自分のことを伝え、相手のことを知ろうとすれば、自ずとその数は増えていきます。

扱うすべての単語を習得することが目的ではなく、小学生は実際に生活の中で使う表現や会話のための単語を多く扱うことで、言い方や尋ね方を学び、他者に配慮しながら伝え合おうとすることが目的とされています。

それは、コミュニケーションの基本となり、相手に伝わった時の喜びや楽しさを実感する、発信を重視した学習へとつながっていくのです。

「小さな変化に見えて、大きな改革です」

Q 小学校英語は、どれくらい勉強するの?

A 週に2コマ程度です。

これまで5、6年生で行われていた「外国語活動」は、年間の授業時間数は35コマ(1週間に1コマ程度)の設定でした。

次期学習指導要領では、5、6年生の英語は年間に70コマ(1週間に2コマ程度)、3、4年生の「外国語活動」は年間に35コマの設定です。

「小学校の英語は1週間に2コマ程度」という時間数だけ聞くと「あまり大きな変化ではない」と感じてしまうかもしれません。

しかし、3~6年生の4年間の時間数で考えると、これまでが70コマ(「外国語活動」のみ)だったのが、次期学習指導要領によるカリキュラムでは210コマになるわけですから、小学校で英語にふれる時間は3倍になる計算。これほど大きな変化はあったことではありません。それだけ、今回の英語教育改革には力が入っているということでしょう。

Q 小学校の英語が増えた分、中学校は楽になるの?

A 中学校の英語もレベルアップされます。

今回の英語教育改革の中で、中学校の英語は、小学校、高校と同様、レベルアップします。まず、扱う単語の数が大幅に増えます。現行の学習指導要領では、中学校の3年間で扱う単語の数は1200語程度とされてきましたが、次期学習指導要領では、小学校で扱う単語も含めると2200~2500語程度と、ほぼ倍になります。

また、in front ofなどの連語や、excuse meなどの慣用句については、これまで学習指導要領に具体的な例示がありませんでしたが、次期学習指導要領では「活用頻度の高いもの」という表現に変わり、教科書によっては従来よりも増える可能性があります。

さらに、これまで高校で学習していた現在完了進行形や仮定法も中学校で扱います。導入的な内容を小学校で済ませるようになる分、中学校の学習を充実させ、高校での飛躍につなげるという連携も強化されていきます。

WOW!

HAPPY?



YOU ME

Go! Go!

